

## 説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

聖書の中で「ぶどうの木」というのはイスラエルを指すのによく用いられる表現で、旧約の預言者たちはそれをあまり良い意味では使いませんでした。どちらかという、不信仰で墮落をしていくイスラエルの民を現していることが多いのです。

しかし、イスラエルの民は、やはりぶどうの木の譬えを大変誇りに思っていました。そして弟子たちも、自分こそはまことのぶどうの木であると考えていたのでしょう。

ですから、主イエスのお話を聞きながら弟子たちはびっくりしたと思います。主イエスが自らを真のぶどうの木と語り、あなた方はその枝であると語ったからです。

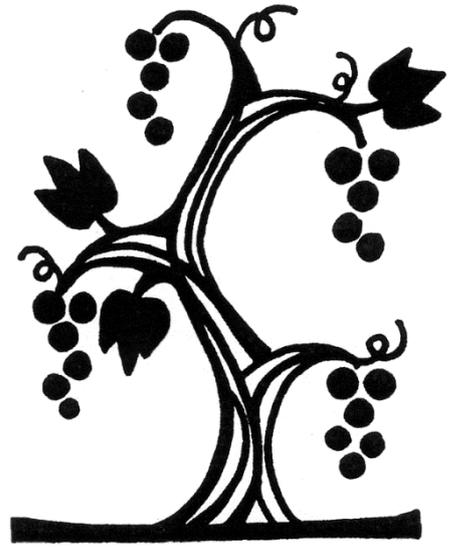
「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」この御言葉は私たちにとって心地良く安心感を与えてくれます。しかし、弟子たちにとって「枝」というのは、あまり嬉しい譬えではありませんでした。ぶどうの栽培は多くの手間暇を必要といたします。実のなる枝と実のならない枝とを上手に区別をして剪定をしてゆく。そういう意味では「枝」というのは、いつ切り取られ捨てられるか分からない存在であったわけです。

また、当時は神殿で供え物を焼いて捧げました。その時に人々が焼くための薪を持って行くのですが、持って来てはならないもののひとつに「ぶどうの枝」がありました。なぜなら、ぶどうの枝は燃えやすくて直ぐに燃え尽きてしまうので、供え物を焼いてしまうだけの火力がないからです。ですから、「ぶどうの枝」というのは役に立たないものの象徴でありました。

切り捨てられ、役立たずということの印しとしてのぶどうの枝。そんな枝に自分たちが譬えられたものですから、弟子たちは「ええー、それはいくら何でも…」と思ったのではないのでしょうか。そういう意味では、弟子たちは主イエスに大変厳しい自己認識のあり方を迫られたと言ってもよいのです。ひょっとすると、切り捨てられるかも知れない存在、ひょっとすると役に立たないままの存在、その枝が生きてはどうか、それは豊かな実を結ぶまでに農夫である神さまが手をかけて下さるということなのです。

枝は自分から木にくっつくものではありません。逆に木が枝を張り、養分を送り、成長させて下さるのです。主イエスは繰り返し何度も「つながる」という言葉を語ります。「つながる」ことは、一人では出来ません。必ず相手があって「つながる」ことが出来るのです。誰かと繋がっていたいという思いは、私たちの根源的な欲求でもあります。

よくルーテル教会で、信仰のタイプを表現する譬えに、「子猿の信仰」と「子猫の信仰」というのがあります。小猿は親猿と一緒に移動する時、よく親猿に抱っこしたりおんぶしている姿を見ます。親猿が子猿を運んでくれるという点では微笑ましいし、ほのぼのとした気持ちになりますが、ふと気を抜いて、小猿が手を離したり、何かの拍子に振り落とされてしま



*I am the vine  
you are the branches*

うと、小猿は落っこちてしまいます。ですから小猿も必死です。抱っこやおんぶというよりも「しがみついている」という表現の方がぴったりかもしれません。

一方、猫の場合ですが、親猫は子猫の首根っこをくわえて大事に移動します。この姿はどこかの宅配業者のシンボル・マークにさえ使われています。つまり、親猫が子猫を大事に運ぶように、あなたの荷物を大切にお運びしますということをアピールしている訳です。

子猿が必死にしがみつかなければならないのに対して、子猫の場合はただ力を抜いて安心して親猫に身を任せておけばよいのです。

信仰も同様です。私が自分の力でしがみつくように一生懸命神様を信じるのは「小猿の信仰」です。つかまる力（信じる力）が弱くなったら落ちてしまいます。そのような信仰は、いつもびくびく、おどおどして安心感などは感じられません。「子猫の信仰」は、逆に親猫（神さま）がしっかりと私たちをつかんで下さっています。だから、私たちは安心して身も心も任せることができるのです。

もし、神さまを信じるのが、一所懸命頑張って神さまにしがみつくとしたら、赤ちゃんやお年寄り、力が弱っている人や、疲れている時、頑張る力のない病気の人や障がい者、信仰の試練に打ちひしがれている人はどうになってしまうのでしょうか？

神さまが私たちを愛して下さるのは、私たちがよい子で神さまのお眼鏡にかなったからではありません。むしろ、神さまを全身全霊をもって愛することはおろか、一日10分でさえ神さまに心を向けることが出来ないでいる私たちです。そのような何の価値もないぶどうの枝のような私たちをご自身の宝物として下さる神さまの、変わる事のないご意志こそが神の愛であります。この神さまからの一方的なそして変わる事のない愛を信じるからこそ、ルーテル教会では信仰告白がまだ出来ない赤ちゃんに幼児洗礼を行うことが出来るのです。また、重い障害を負っていらっしゃる方や病床で意識を無くされている方も同様であります。同じようにぶどうの枝である私たちは、ただひとえに真の命のぶどうの木である主イエス・キリストに身を委ねる形で繋がっていくのです。

これからご一緒に聖餐に与ります。聖壇には聖卓、すなわち主の聖餐のテーブルが中心に置かれています。食卓のこちら側には私たち生ける者、そして見えない向こう側には既に天国に召された聖徒の群れが集っていることを思います。この恵みの食卓は終わりの日のキリストの祝宴の先取りであり、この聖餐に与ることは樹木にとっての樹液と同じようにキリスト者にとって十字架の血潮、キリストの命に繋がっていることの目に見える印しであります。「わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝である。」この恵みを噛みしめながらご一緒に主の命に繋がって参りましょう。

十 人知ではどうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン

